

宮城野会 会員数 195名(12/1現在)

放送大学と宮城野会の一人ひとりをつなぎます

放送大学 同窓会

宮城野会会報

45号

フォトギャラリー
学習センターの四季展

(春・夏の風景は学習センターの2階廊下に、秋・冬の風景は3階廊下に展示されています。)

発行日 : 2022(令和4)年12月

発行 : 放送大学同窓会

宮城野会

放送大学宮城学習センター内

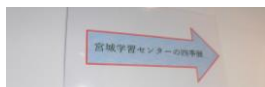
〒980-8577

仙台市青葉区片平2-1-1

TEL : 022-224-0651

Fax : 022-224-0585

E-mail miyagi-sc@ouj.ac.jp



CONTENTS

2～5 宮城野会 とびっくす

6～8 招待席 客員教授

9～10 交流ひろば

11 宮城学習センターからのお知らせ

12 同窓会宮城野会からのお知らせ

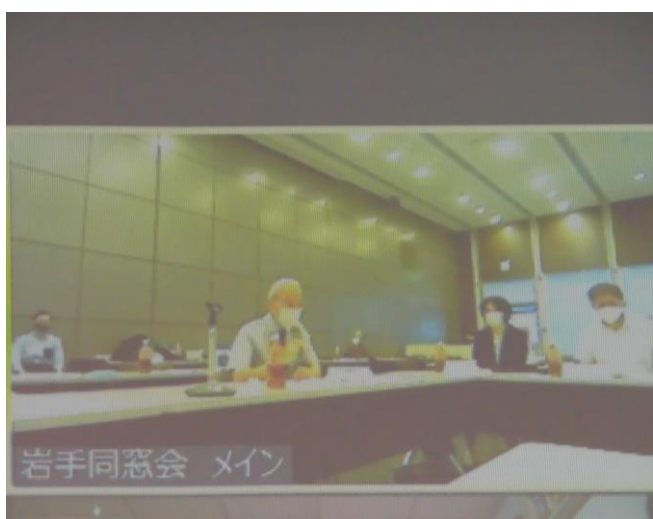
宮城野会の
活動を紹介
するページ
です

宮城野会

放送大学同窓会

第9回東北・北海道ブロック地区交流会

コロナ感染予防のためハイブリッド形式で実施



アイーナ・いわて県民情報センター（zoom 画面）



宮城学習センター

日 時：令和4年9月10日（土）～11日（日）

開催場所：アイーナ・いわて県民情報交流センター

各県学習センター（zoom 参加県）

目 的：東北・北海道ブロック同窓会が一堂に会し、情報交換を行う。

公開講演会等を通して、放送大学、学生同窓会、一般の皆さんにも参加して頂き、
現代社会への視野を広め、地域に根差した大学を目指す放送大学の生涯学習広報活動
に協力することを目的とする。

内 容：同窓会情報交換会（懇親会・盛岡市内見学）

公開講演会 「宮沢賢治と音風景」

岩手大学 教授 木村直弘 氏

とびっくす

第9回 放送大学同窓会 東北・北海道ブロック 地区交流会 I n 岩手に出席して

二郷 成子

今年の3月 宮城が交流会の当番になったこと、役員はもとより、ゼミの活動の様子や会長のお箏の演奏ご披露と、東北の各地からおいでになった同窓会生に数々のおもてなしをしたことが昨日のように思い出された。

ブロック交流会を体験したばかりであったが、9月10日と11日に 第9回目のブロック交流会が今年度の開催地、岩手県盛岡市の盛岡西口 「アイーナ 804A」で開催された。

宮城からは佐々木会長、竹内、二郷の3人が、現地に出席することになっていたが、新型コロナウイルス感染予防のため、ウェブでの参加に切り替えてもらい、宮城学習センターの第2講義室にパソコンとスクリーンを用意しての出席となった。実際は午後1時からの開催だったが、ウェブでの参加は慣れないこともあって、午前中からセットの確認などで時間をとり、交流会に参加した。ウェブでの参加は宮城の他 同窓会連合会の矢野さん、北海道旭川の山崎さん、放送大学本部から隈部副学長、山形県の方などであった。ブロック交流会は午後1時から開会の運びとなり、岩手同窓会森会長の歓迎の挨拶の後、岩手学習センター所長による挨拶が行われた。森会長の司会進行のもと、開会から15分後より第1部に入り最初に本部隈部副学長から 7月に行われた前期の受験結果を数字で報告を受けた。1教科50分の回答時間の平均は35分間、1日当たり受験者が1.5から2.3科目を受験したこと。また1日当たり受験時間は1位が10時、2位は13時から14時、3位は22時に受験する人が多かったということでした。試験終了日の前日、9時から11時、日中に受験した人が多く、次回に向けて大変参考になったことが報告された。心配なのは受験者が不正を働くこと、厳しく本人確認ができるシステムを入れたいとも報告された。

次に各同窓会との交流会・意見交換会が約1時間30分かけて行われた。同窓会の運営についてがメインの内容で、定期総会を行っているかについては、4月から6月にかけて実施し

◆ 宮城野会 トピックス

ている。SC との打合せは有と答えた同窓会が4、無と答えた同窓会が1、随時が1と報告があった。役員会については随時が多かった。宮城だけが毎月と答えた。会報の発行は年2回が5とほとんどの同窓会が実施している。活動の報告は1から9までの内容があったが、時間をかけて交換したのは、同窓会活動と費用についてだった。会費は1000円から1500円をいただき活動しているが、役員の手当てが旅費を支弁というところと、ないという同窓会もあり、本部から補助金の交付もあるという助言もいただく。またどの同総会も役員のなり手がいないという深刻な話題提供があり、同窓会の活動の運営の困難さが多く出された。宮城野会会長の提案「役員ではないが、サポーターになって、行事のたびに応援をしてもらっています」という発言が、各同窓会運営に一筋の光りを与えました。「役員にはサポーターからなってもらうこともある」ということも伝えられた。次回開催地は青森が決定されている。このような内容で終了した。

第2部は15時30分から約1時間 岩手大学人文社会科学部 木村直弘教授より「宮沢賢治と音風景」という公開講演会を聞くことができた。

宮沢賢治は、擬音語を童話の中に多く取り入れている。目を閉じると風の音、波の音、空気にも音が感じられる。この音は日本では「音の風景と」訳されるそうです。サウンドスケープという語はカナダの現代音楽作曲家の R.マリー・シェーファーにより 1960 年代に提唱され世界中に広まっている。地球上のさまざまな時代や地域の人々が音の世界を通じて……どのような情報をえているのか、それぞれの音環境を個別の「文化的事象/音の文化」として捉えている。こういった内容から入って、ちょっと難しかったが、宮沢賢治はこのサウンドスケープをどの作品にもうまく取り入れている。例えばざしき童子のはなし……家のどこかのざしきで、ざわっざわっと箸の音がしたのです。このような表現が、童話の中に見受けられるのです。宮沢賢治ほど擬音の作り方を工夫し、たくさんの詩や童話に載せている。彼ほど眼にうつる事象の動きを、さかんに音の変化や流れに移し変えようとした作家はいない。貴重な並外れた人材だったという講演でした。交流会は第2部で終了。閉会になったのでウェブも終了とした。約3時間の交流会だったが、話題は同窓会にとって役立つ内容であったので、今後同窓会の中で、このような問題が生じたときは役立つのではないかと、思った。

このような行事に出席できたこと初めてだったが、みなさんに感謝いたします。ありがとうございました。

学位記伝達式と入学者の集い

9月25日（日）、10：00からホテル白萩で学位記伝達式が行われました。出席された17名の卒業生に、佐々木美枝子宮城野会会長がお祝いの言葉を述べました。

会場入り口で、宮城野会の活動を紹介するとともに入会案内、バッチの販売を行いました。卒業された方から5名の新入会員をお迎えすることができました。



佐々木美枝子宮城野会会長祝辞



宮城野会活動紹介

入学者の集い 終了後学習相談



オンラインによる学長式辞



学習相談の様子

同日、13：30から新入学者27名が参加して入学者の集いが行われました。

入学者の集いでも宮城野会の活動をパネルで紹介しました。

終了後、学習相談を行いました。

「インターネットでの視聴は、BSで放送されている時間以外でも視聴することが出来るのでしょうか。」「10科目登録したのですが、通信指導は勉強し終えた科目から、順々に提出した方がよいのでしょうか。」等の相談がありました。

これまでの学習経験を生かし、その場でスマホから放送授業インターネット配信に入れる事を見てもらい、いつでも視聴出来ることとお話ししました。また、通信指導を提出する期間があることも伝えました。

招待席

誠実ということ

放送大学宮城学習センター客員教授 戸島貴代志

かつてヨーロッパでペストが大流行したとき、人々は、日々数十人、数百人と亡くなってゆく現実に、蒼ざめるところかむしろ次第に慣れていったといいます。現代の感染症や様々な紛争でもそうですが、毎日のように人がたくさん死んでいく風景が、まさに毎日続くがゆえに日常化してゆくわけです。フランスの作家、カミュが小説『ペスト』（一九四七）で描いたのも、抗えぬ自然の無慈悲に翻弄される人間の哀れではなく、死臭の漂う街中を平気でオペラに通う人々の異様な無感覚でした。またカミュに先立つこと数百年、同じくペスト惨禍をフランスの思想家モンテーニュがすでに『エッセー』（一五八〇～一五八八）で取り上げています。そこでは、「今日でなければ明日であろうと、自分で掘った墓穴に淡々と入る」農夫たちの姿や、「自分で自分に土を被せる」或る小作農の、身構えることなく死を平然と迎える姿などが克明に描かれています。そのあまりに無防備で無頓着な死に様は、その土地の領主でもあったモンテーニュをして、いわゆる「メメント・モリ」（死を忘れるな）というストイックな立場から、むしろそれとは逆の「死は何ほどのものでもない」という一種のオプティミズムへと転身させたほどでした。しかしながら彼の見たこの田園の風景は、同時に、彼ら農夫たちにとって死が「何でもなくなってしまう」風景、その意味では一種の慣れからくるあの無感覚の席卷する風景でもあったにちがいません。

慣れることがこうした無感覚を伴うとするならば、そしてその無感覚が遣り過ぎしてはならないものを遣り過ぎす無感覚でもあるならば、反対に、みな慣れてゆくなかひとり慣れないでいるには、目の前のひとつひとつの現実から目を逸らさない愚直な感受性がまずは必須となるでしょう。だれもが恐れる死を前にして、これを歯牙にもかけぬ聖者然とした大胆さも崇高なら、死どころか日々の些細な出来事の一々に立ち眩む小胆もまた高貴なのだということです。臆病あるいは小心とさえいえる後者の姿勢、すなわち足下の現実を踏み越さず、そこで出会うもののひとつひとつにまともに向き合うこと、それらを己の都合でいわば十把一絡げにしないこと、つまりは利害を問わず、遣り過ぎしてはならないものを遣り過ぎさないこと、カミュはこれを「誠実（オネトテ）」と呼びました。

◆ 「招待席」は、客員の先生に原稿をお寄せいただいています

*

見るもの聞くもの触れるものすべてに不慣れで、いつまでたってもそれらに馴染まず、そのゆえにかえってそれらのすべてに心を奪われるような未熟を、この「誠実」は持ちあわせています。遣り過ごしてはならないものを遣り過さない（あるいは遣り過せない）この「誠実」は、己の直面している足下の現実つまりは己の現在のひとつひとつに釘付けにされ、それに染め抜かれる未熟（つまり熟れないこと）でもあるわけです。重要なのは、この「誠実」が、当の己自身に対して働くそれでもあるという点にあります。己自身に働く誠実とは、己が出来上がろうとするたびに当の己を元の未熟へと連れ戻し、いまだ形のない純粋な可能性へと己を留め置かんとする、その意味ではある種のしなやかさの源といってもよいでしょう。もちろんそのしなやかさは、ナレからくるしなやかさすなわち熟練や日常的習慣のしなやかさではありません。むしろ熟練や習慣のしなやかさをも一種の出来上がった硬直とみなせる上位のしなやかさ、日常の安定感や安心感に己を埋没させないしなやかさです。

総じて「誠実」は、己をそのつど己のはじめへと差し戻し、己と己の生きる世界とをそれとしては出来上がらせない仕方でそれらを陳腐なものにしてしまわぬ力です。いかなる成果もナレ（成れ）の果てとみなせる力といってもよいでしょう。自己や世界をどこまでも完成＝凝固させないしなやかさという点では、この力は、かぎりなくみずからを開いてゆく生命の力と似ています。あたかも万能細胞へと個別細胞を初期化するごとく、あるいは次世代へと惜しみなく命を差し出す生き物のように、こうした力やしなやかさすなわち「誠実」は、己を超えた己自身の純粋な可能性へと己を差し戻す生命自身の秘める創造力と等価です。

*

意識するしないにかかわらず、私たちはつねに何らかの生の基本原理に則って生きています。西欧のいわゆる「生の哲学者」といわれる人たちは、こうした原理を或る種の「効率性」から規定し（ベルクソン）、あるいはそのつどの主体の利害や用不用によって世界が拡大・縮小させられるという、独自の「遠近法」の概念で説明しています（ニーチェ）。彼らによるなら、平生の世界からしてすでに、そしてその世界を生きる自己からしてすでに、全体を要素で再構成して世界を算定する「効率化」と、己の関心に基づいて世界を価値付ける「遠近法」とによって、一部が増幅・拡大され一部が縮小・無視された、いわばデフォルメされた世界・自己だということになります。好むと好まざるとにかかわらず、ことのはじめからしてすでに、やはり私たちはみなつねに自己の利害にかかわらないものは遣り過すようにできているようです。

こうした視点からするならば、いつの間にか身に付いたあの〈ナレ〉を自覚するには、彼らのいう「効率化」や「遠近法」によって限定される前の世界や自己へと、つまりはデフォルメ以前の世界や自己へと、努力して歩み戻ることが必要になりそうです。この歩み戻りは、利害を問わず己の現実^にに身を置き、出会うもののひとつひとつにまともに向き合うこと、それらを己の都合で十把一絡げにしないこと、とときに「誠実」に関して述べたことと事柄としては同じです。すなわちこの歩み戻りという一種の覚醒の試みは、出来上がろうとするたびに自分を自分の大本へと連れ戻し、その大本の秘める無限定な可能性のほうから自分をやり直す創造（再創造）の試みと同じです。

ちなみにこの〈自分の大本〉のイメージを、ニーチェは「私たちは一本の樹木についた芽である」と表現し、それに続けてこう言っています。「当の樹木の関心において私たちがどうなるものやら、私たちが何を知ろう！」、と。「芽」の大本であるこの「樹木」は、「芽」には知りえない「芽」自身の無限の可能性だということです。デフォルメ以前の自己・世界に戻りつつ、自己をその大本たる存在基盤からやり直し作り替える試みは、したがってこのニーチェの言葉を借りるなら、「芽」から「樹木」を規定せず、逆に「樹木」のほうから「芽」を規定する試み、といえそうです。「芽」という己の小さな生存原理で「樹木」という大きな宇宙を束ねてしまわない力、すなわち己の知らぬ己の無限の可能性へと己を擲つしなやかさ、このようにあらためて「誠実」を言い換えることができるかもしれません。

〈プロフィール〉

戸島貴代志（としまきよし）
東北大学大学院教授 放送大学客員教授
専門は哲学。

著書は『技術者倫理入門』（共著）、
『創造と想起 ― 可能的ベルクソニズム ―』など。
昨年、『ほんとうのことば』を東北大学出版会から刊行。



私と放送大学

千葉 浩一

私が放送大学に入学したのが2007年の2学期に入学しましたので、15年目になります。

入学したきっかけは、放送大学のパンフレットを手にしたことからになります。仕事が終わった後に空いた時間があったことや学びたいという思いがあったことから入学を決めました。

入学した当初は学習の仕方がわからず、初めての単位認定試験では散々な結果となりました。学習の仕方を変えてみて何とか1コース目を卒業し、現在では5コース目を履修しています。

放送大学に入学して良かった点は、放送授業の科目数が多く目的に合わせた履修をできること、もう一つは特色のある面接授業を受けられるという点です。特に面接授業では宮城学習センターだけではなく東北の各県の学習センターで面接授業を受けました。

その中で特に印象に残っている2つの授業があり、1つ目が宮城学習センターでの「(実験)鉄を造る」です。実験は高校生以来で、ガスバーナーでの実験で果たして本当に私にも出来るのかと思っていましたが、上手く出来たことに感動しました。

もう一つは、弘前学習センターでの「炎の津軽学」です。8コマの授業を8人講師で行われました。弘前伝統ねぶたや、津軽塗の体験、文学や津軽三味線などの伝統芸能まで講義を受け、その土地でなければ体験出来ないものでした。

開設科目一覧にある各地の面接授業を見ていると各地で特色のある授業が行われていて、定年後に全国各地の学習センターで受講出来ればと思っています。

最近では、学習意欲はあるものの、年を取るにつれて覚えられる量が少なくなってきた事や仕事との両立という問題もありますが、今後も「継続は力なり」という言葉のとおり続けていき、自分の知識を深めていければと思っています。

「む病息災」で学び続けたいもの

教養学部【生活と福祉コース】 森 俊英

5枚目の学生証、酷い顔の自撮り写真を見ながら改めて学びを振り返っています。平成22年の大学院修士選科生・全科生から始まり、間を空けて心理と教育コースに入学・卒業、続けての生活と福祉コースで、もう12年間もお世話になっていることになります。ただ、最初は「もっと深く学ばなければ＝研究」の筈だったのに、その方向が大きく変わってしまいました。

「目の前の事にのみ紛れて、月日を送れば、成す事無く身は老いる(徒然草)」、私の学びは、やっぱりこの188段に登場する法師と同じで、決意とは異なり何年たっても同じようです。まあ、昔の仕事が生身の人間相手だったので、「目の前の事」を第一にせざるを得ず、性にも合っているのでしょう。これがいつの間にか、一つの専門技術として身に沁みついてしまっているのかもしれない。

ところで、皆さんは自分の死について考えたことがおありでしょうか？

30、40代は「遠い将来のこと」、60、70代は「まだ先のこと」、80代になってようやく「近い将来のこと」と考えるそうです。メディアでは、100歳を超えて何の心配もなさそうな元気な高齢者がよく紹介されていますが、いわば、彼らはスーパー老人、オリンピック選手以上の方です。しかし、民生児童委員の活動から垣間見えるは、努力すれば自分もなれると信じ「他人の世話にならん」と頑なに思い込んでいるご高齢者の多さです。かく言う私も、数年前まではそうでしたが、今や病気の総合デパート化、全く考え方が変わりました。また、民生児童委員活動では、「えっ、あの方が」という体験が続いています。もう死は自分事であり、「目の前の事」となってしまっています。

「やっぱり学ぶのは、そこしかない！今でしょう！」と姿勢が変わっていくのは当然と思っています。まずは、真っ先にお世話になる向こう三軒両隣の関わりと、民生児童委員の目線での「目の前の事」で少しお役に立つことを探りながら学び続けることが第一です。放送大学学歌の「知は光」が示すように、このような身近な課題でも大きな力となる学びができます。ひょっとすると、「目の前の事が広く深く学べる」世界に一步近づけるのでは、などという夢をみています。

ちなみに、私には、治療中または術後経過観察中の病気が、喘息、睡眠時無呼吸症、頻尿、心房細動、大腸がん、脊柱管狭窄症の6病があり、それらの病と闘いながら「6病息災で今日も元気、さあ勉強もがんばろう」と開き直って毎日を過している状況です。本当は、他にも高血圧、高脂血症などもあるのですが…。

何はともあれ、決意は顔に表れると言います。今まで書いてきたことが嘘っぽくならぬように、学生証を意欲に満ちた凛とした顔立ちの写真に変えないといけませんね。

宮城学習センターからのお知らせ

【 2023（令和5）年度 4月入学生募集中！ 】

■教養学部 ■修士選科生・修士科目生 出願受付は以下のとおりです。

第1回募集：2023年2月28日（火）まで

第2回募集：2022年3月1日（水）～3月14日（火）

募集要項は放送大学 Web ページよりご請求ください。



資料請求 QR コード

ー大学案内・入学相談会ー

日時：2023年1月28日（土）、2月18日（土）

① 10：00～ ②11：00～ ③14：00～ ④15：00～

事前予約制。ご希望の時間①～④をお知らせください。

会場・申込先：宮城学習センター TEL022-224-0651



入学相談会申込 QR コード

【 公開講演会（ハイブリッド形式）のご案内 】

日 時：2023年2月4日（土） 13：30～15：00（受付13：00～）

講 師：東北文化学園大学 教授

放送大学宮城学習センター客員教授

加藤 由美 先生

演 題：「在宅の療養生活を支える多分野・多職種ネットワーク」

定 員：15名（宮城学習センター講義室）

：85名（オンライン配信〈Zoom〉）

申込先：宮城学習センター

*加藤先生のご専門は「医療福祉学」です。

詳細が決定いたしましたら、宮城学習センターのHPに掲載いたします。

Zoomを活用して自宅にて、
公開講演会の聴講ができます！

【 宮城学習センター学生による研究集録の配布 】

「宮城学習センター学生による研究集録」は、宮城学習センター所属の現学生・元学生が執筆した論文を集録したものです。

これまで、創刊号、2号、3・4号合併号、5号を刊行し、宮城学習センターで配布しております。郵送配布もしておりますので、ご希望の方は、以下①②を学習センターまでお送りください。

①任意様式にお名前・ご連絡先・ご希望の号を明記

②返信用封筒（角2封筒、宛名明記、送料分の切手貼付）

<送料> 創刊号1冊の場合、3・4号合併号1冊の場合 180円

2号1冊の場合、5号1冊の場合 215円

2～3冊の場合 310円

同窓会 宮城野会からのお知らせ



◆2023年2月25日(土)

会 場：宮城学習センター 講義室

時 間：13:00～16:00

修士論文発表

今野正巳さん

『ふいご祭りの伝承の変遷』

－衰退の中で伝承される祈りの心－

伊藤克秀さん

『被災児童の不安を軽減する為の方
法の検討』

講 演

金森安孝先生(放送大学非常勤講師)

『仙台城大手門の復元』

【問い合わせ先・申し込み先】

宮城学習センターの窓口・電話・FAX

Eメールでお申し込みください。

TEL : 022-224-0651

Fax : 022-224-0585

E-mail miyagi-sc@ouj.ac.jp

申し込み締め切り

2023年1月31日(火)

年会費 振込のお願い

◆年会費振込用紙を同封しております。ゆうちょATMから送金されますと、窓口よりも手数料が安くなります。

◆年会費を納入された方には、振込用紙はありません。手違いがありましたらご連絡ください。



各500円 ▶ バッジ購入希望の方は、宮城野会役員または宮城学習センター事務室を通してお申し込みください。